ANDERSON BRUFORD WAKEMAN HOWE

AN UDO ARTISTS PRESENTATION 1990

ANDERSON BRUFORD WAKEMAN HOWE

アンダーソン、ブラッフォード、ウェイクマン、ハウ日本公演

3/1 ●東京 NHKホール
主催●東京放送

3/2 ●東京 NHKホール
主催●東京放送

3/4 ●東京 NHKホール
主催●東京放送

3/5 ●大阪 フェスティバルホー
主催●エフエム大阪

3/7 ●横浜 横浜文化体育館
主催●ウドー横浜/TVKテレビ 後援●FM横浜

3/8 ●東京 サンプラザホール

招聘●ウドー音楽事務所

最強のイエス・サウンドの再現！／ABWH

大森庸雄
TSUNEO O'MORI

前回、88年4月、イエスとして来日した時ジョン・アンダーソンは、彼の長いキャリアの中の大きな思い出として『危機』(CLOSE TO THE EDGE) を完成させた時だと言っていた。1972年9月に発表されたイエスの5枚目のアルバム。このアルバムとその前の71年に発表した『こわれもの』(FRAGILE) こそが、イエスの長い歴史の中で最強のメンバーといえるジョン・アンダーソン、スティーヴ・ハウ、リック・ウェイクマン、クリス・スクワイア、ビル・ブラッフォードから作られている。その5分の4が、90年代に動き出した。

ジョン・アンダーソン：ランカシャー、アクリントンの生まれ。ダン・ヘッジスの書いたイエスのバイオグラフィーによれば、14才で学校を卒業した子供達は、残りの人生をほとんど、工場の門をくぐることで過ごすそんな町だという。煉瓦を港まで運ぶトラックの運転手をしていたジョン・アンダーソンは、リヴァプールの港町で、あのビートルズも出演していたキャバーンというクラブに顔を出すようになり、音楽にひかれるようになったという。最初に入ったグループは、トニーというジョンの兄の組んでいたウォーリアーズというグループだった。ジョンはウォーリアーズのヴォーカリストが抜けた後に加わり、兄が結婚をしやめた後もそのままバンドをひきついだ。

ソロ・レコードを出したり、いくつかのバンドを経験した後、シンにいたクリス・スクワイアと知り合い、サイケデリック・バンド、メイベル・グリーアズ・トイショップを結成。

ビル・ブラッフォード：軍人の息子として生まれ、恵まれた家庭生活を送っていた。小さい頃ジャズにひかれ、アート・ブレーキーに憧れ、ドラムスを始めたが、15才で、ジンジャー・ベイカーを見て、新しいショックを受ける。それはジャズのスピリットを持ち、ハードなロックでもあった。1968年1月、リーズ大学を続ける考えを変え、ミュージシャンになることを決意、サヴォイ・ブラウンのオーディションを受ける。しかし数回のライヴですぐに脱退、ペーパー・ブリッツを経て、メイベル・グリーアズ・トイショップに加わる。そしてトニー・ケイに続き、一時、トイショップにいた、ピーター・バンクスを再びメンバーに迎えた彼等は、バンド名をイエスとし68年8月、初のライヴを行ったのであった。

リック・ウェイクマン：ウェスト・ロンドンの生まれ。その昔、ダンス・バンドにいたというウェイクマン家には、ピアノがあり、幼いリックは、父さんのようにピアノを弾きたい、と思っていた。そして7才の時、先生につきクラシック・ピアノのレッスンを始め、10才にして早くも音楽祭で優勝するという栄誉も受けている。14才で組んだアトランティック・ブルースを皮切りにバンドに加入しながら、ピアノのレッスンも続けた。さらにトニー・ヴィスコンティ、デニー・コーデルというプロデューサーと知り合ったことから、レコーディングのセッション・ミュージシャンとしても活動、デヴィッド・ボウイからブラック・サバスまでそのセッションの数は、2000にものぼるといわれている。ストローブスのレコーディングにつきあったことから、デイヴ・カズンズに誘われ、バンドに加入。しかし翌年、早くも音楽的相違が生じた。そこにトニー・ケイの後釜を探していたクリス・スクワイアの誘いで、1971年、イエスに加入。

スティーヴ・ハウ：ロンドンの生まれ。幼い時から、両親のレコード・コレクションからレス・ポール&メリー・フォード、チェット・アトキンス、デュアン・エディなどのギタリストのレコードを好んで聞いていた。また兄のフィルがクラリネットを演奏していたことから、ジャズにも影響される。父親に買ってもらったアコースティック・ギターを手に入れてからは、ますます頭の中は、ギターでいっぱいになった。スクール・バンドから、いくつかのバンドを経て、68年ボーダストに加入。脱退後、1日だけ、キース・エマーソンのナイスにいたこともあるが、イエスのオーディションを受け、迎えられる。

4人の強者たちは、ここに再び集結した。1988年、ロンドンでジョン・アンダーソンはスティーヴ・ハウと再会、一気にビル・ブラッフォード、リック・ウェイクマンのＡＢＷＨのスーパーグループ結成が話し合われ、翌89年構想は、現実となり、さらにトニー・レヴィン(ベース)、ジュリアン・コルベック(キーボード)、ミルトン・マクドナルド（リズム・ギター）というメンバーをサイドに従えるという強力なラインアップで活動を始めたのである。

最強のイエス・サウンドの再現に加え70年代から80年代、それぞれの道を歩んでいた4人がその後の多彩なキャリアの積み重ねを経てのプレイ、どんな華麗なテクニックを披露してくれるか、ステージからは目を一時も離せないだろう。

ANDERSON BRUFORD WAKEMAN HOWE

THE GROUP

「消え去れ、絶えず猛威をふるう
パワープレイ・マシンよ。
我々の真の姿を映し
世界に対する見方を映す窓を
破るであろう者たちのために
我々の音楽的結束を断とうとするおまえ。

私は文字どおり、おまえの手から逃れたのだ」

1988年夏、ジョン・アンダーソンがハイドラ島で書いた多くの曲の中のひとつ(その一節)である。昨年、当初の予定以上の期間ギリシャに滞在したことにより、アンダーソンは事実上キャリアの転換点を迎えたといえるだろう。彼はその間に、前進するためには（音楽的な意味でも感情的な意味でも）ロサンジェルスに戻るべきではないという思いを次第に強くした。「あそこで3枚のアルバムを作ってみて、僕らの住む世界に対する見方が完全に変わったんだ」

ロンドンに戻ると、アンダーソンはスティーヴ・ハウ、ビル・ブラッフォード、そしてリック・ウェイクマンに連絡をとった――多くの人々が今もベスト・ラインナップと見なす、かつてのイエスの中枢だ。「もう一度このメンバーでバンドを組めば、僕らの音楽とアイデアが僕らを真の運命へ導いてくれるのじゃないかと考えた。'70年代にみんなで追いはじめた音楽上の夢が、そこかしこでまた姿を現わすだろう。なんの疑問も抱かず、これだと思ったよ。長年ずっと離ればなれになっていたが、新しいエネルギーの波が押し寄せるのを感じたんだ。『こわれもの』『危機』といった、あの時代の僕らの音楽にそれを感じたのと同じようにね。だから……再結成するしかなかったのさ！」

ONWARDS & UPWARDS

アンダーソンとの再会にあたり、スティーヴ・ハウが彼に聞かせた最初の曲は、なんともその場にふさわしく、後に〝ロング・ロスト・ブラザー・オブ・マイン〟となる作品のコーラス部分だった。さまざまな曲やアイデアが次々と生み出されるにつれて、ジグソー・パズルのピースが少しずつはまるべきところにはまっていく。

このプロジェクトに大乗り気なのは、ビル・ブラッフォードも同様だった。「いろんなアイデアを話しあいながら、ビルがコンピュータライズされた新式のキットを使って、僕らの考えている音楽をふくらませていった。そのサウンドといったら驚異的だったよ」。また、このグループが音楽的にも精神的にもきちんとやっていくつもりなら、ベーシストとしてトニー・レヴィンを加えるべきだ、と提案したのもブラッフォードである。

リック・ウェイクマンの穏やかで誠実そうな少年っぽい見かけの裏には、桁外れの才能が潜んでいる。「彼には爆発的なパワーがある。何気なくプレイしているけれど、モダン・シンフォニック・ロックの世界で彼にかなう者はいないよ」。ウェイクマンもこのグループの可能性を確信し、再スタートを心待ちにしていた。

ジョンはまず、目新しい特別な場所にメンバーを集めて音楽を練りあげようと考えた。そこで彼は次の日曜に早速パリへ飛び、適当なスタジオを物色する。翌日、フレット城に5週間逗留の予約が入れられ、音楽的なアイデアがセーヌ河の流れのようにほとばしりはじめた。

スティーヴとリック、ビルが到着すると、彼らは共に曲作りに取りかかり、さらにそれに磨きをかける——昔どおりの息の合ったコンビネーションが、古城の中で甦った。なにより重要なのは、彼らが曲の長さや音楽スタイルになんら基準を設けなかったことだ。その結果、グループがパリでつくりあげたのは、〝Teakbois〟〝オーダー・オブ・ザ・ユニバース〟など、多様な感覚やスタイルを持つ、演奏時間にして1時間を上まわる作品群だった。面白いことに、一旦マテリアルが出揃うと、曲順(〝テーマ〟から〝レッツ・プリテンド〟まで)はいつのまにか自然に決まっていたという。

そして舞台はカリビーンのモンセラット島へ。クリスマス前にコンティネンタル航空機でマイアミへ向かったジョンは、ビルに言われたとおり、ベーシストのトニー・レヴィンに参加を要請する。3週間後、トニーはアンティグアからアイランド・タクシーでモンセラットへ駆けつけ、ビルと共にマスター・テイクを録音。さらに6週間後、グループがすべてのレコーディングを終えると、今度はベアズヴィル・スタジオに場所を移し、スティーヴ・トンプソンとマイク・バービエロがジョンの助けを借りてアルバムの最終ミックスを行なうことになった。10日間にわたるハードなスタジオ・ワークを経て、冷込みの厳しい3月のある金曜日、マンハッタンにあるアリスタ・レコードのロイ・ロットとトム・エニスがベアズヴィルを訪れ、完成したばかりのアルバムを試聴する。二人はすばらしいニュースを携えてアリスタへ戻り、グループを大いに喜ばせた。そしてまもなく、彼らのファンや忠実なオーディエンスも、ラジオやコンサートで彼らの音楽に接し、その喜びを分かちあうことになるのだった。

クリエイティヴな面において、まだはめ込まれていないジグソー・パズルの最後の一片があった。「音楽的に見て、僕らの曲はステージ・ソングだといつも思っている。ショウで演奏するのにこそ適しているとね。となると、アルバム・カバーからステージ・セットに至るまでの視覚面で僕らの夢を現実にできる人物はひとりしかいない」。そしてロジャー・ディーンが、このグループに関するデザインを全面的に担当することに同意し、偉大な協力体制が再び整えられた。かつてイエスの大半のアルバムのジャケットを飾った空想的なイラストレーションで有名なディーンは、最近スペインからニューヨークのアリスタ本社へ出向き、ニュー・アルバムのアート・デザインを刷り込んだ5,000枚のポスターに署名するというマラソン・サイン・セッションを行ない、15時間ぶっ続けにサインをして、スペインへ帰った。前回彼が自分の作品にサインをしたときは、その作品(『海洋地形学の物語』)が56,000ドルで売れたということだ。現在は彼の弟のマーティンが、ロジャーの作品をもとにしてグループのステージの美術デザインをしている。

スティーヴ・ハウは、昨年ジョン・アンダーソンと話をしていてこう尋ねた、「僕たちはいつ本当の〝グループ〟になるんだろう?」。ジョンの答えはこうだった、「みんなでステージに立つときだよ」。

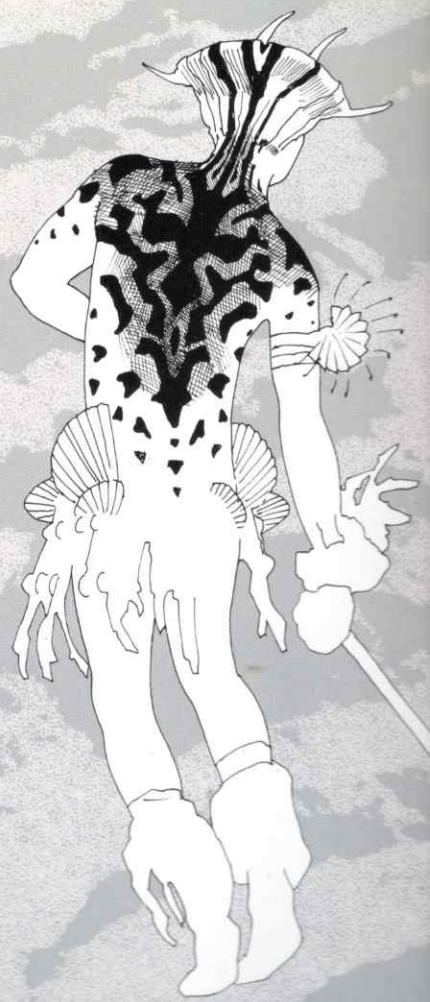
彼らの音楽をどう呼ぼうと——イエス・ミュージックだとか、ナウ・ミュージックだとか、その他もろもろ——それは問題ではない。アンダーソン、ブラッフォード、ウェイクマン、そしてハウは、音と視覚と曲から成る現代のオーケストラ・パフォーマンスを実現しようという構想に自信を持って取り組んでいるのだ。

EVER FORWARD – THE ALBUM – AND SHOWS!

アンダーソン、ブラッフォード、ウェイクマン、ハウ(ABWH)は、5月からワールド・ツアーのリハーサルに入った。〈AN EVENING OF YES MUSIC, PLUS〉と銘打たれたこのツアーは、7月29日のテネシー州メンフィス公演を皮切りに、アメリカ、カナダ、ヨーロッパをまわっている。

ステージ・セットと美術デザインは、兄のロジャーと密に仕事をしているマーティン・ディーンが、ニュー・アルバムの収録曲とアートワークにヒントを得て手がけたもので、ステージは躍動感あふれる音楽と見事にマッチした特別な空間となる。ロジャーもマーティンも、このグループと密接に関わることによって最高のデザインを生み出したのである。

「ギリシャに滞在したこと、それにリックとビル、スティーヴとの音楽的な親交を暖めなおしたことで、また一緒に活動するのは僕らの〝バースライト〟(生まれつき持っている権利)だと確信した。これが僕らの音楽なんだ」



JON ANDERSON

'70年代、'80年代にイエスの推進力として作用したジョン・アンダーソンの効果的な楽観主義は、'90年代に突入しようとする今、《アンダーソン、ブラッフォード、ウェイクマン、ハウ》にも深く浸透している。彼の独特なソングライティングと聞き間違えようのないヴォーカルは、この強力な新しい音楽ユニットにおいてもっとも重要な要素といっていい。ジョンの基盤は、なによりもアーティストとしての真摯な姿勢と音楽に対する誠実さにある。ABWH の音楽は、ジョンのキャリアの中でも最高に活動的でクリエイティヴな一時期を画するものだ。メインストリームに飛び込むことを嫌うジョンは、常に音楽的な視野を広げようと努力している。

曲作りとパフォーマンスのほか、ジョンはクリス・キムジィと共同でこのプロジェクトのレコード・プロデューサーをも務め、スティーヴ・トンプソンとマイク・バービエロを起用した最終ミックスの段階に至るまで、独自の感覚でオリジナル・サウンドを求めつつ音楽面の指揮に当たった。現代の録音技術に大きな関心を寄せるジョンは、これまで常にテクノロジーを先駆けてきた。ステージ・ショウに関しても、ロジャー&マーティン・ディーンと徹底した共同作業を進め、彼のアイデアから生まれたイメージや視覚効果がショウのすばらしさに大きく貢献している。音楽は正に、ジョンという名職人によって仕立てられたオーダーメイドだ。

スタジオやステージを離れたジョンの素顔は、美しい愛妻ジェニーと、デボラ、デイミアン、ジェイドという子供たちを大事にする家庭人である。家庭こそは熱意とやる気の源であり、彼はそこからアイデアを引き出すのだ。「ABWHでは、メンバー全員が当初のアイデア、計画を実現させたいと願っているし、その計画に向かって突き進んでいる」。どこまでも意欲的なジョンは、最近ヴァンゲリスとのニュー・アルバム『ジョン&ヴァンゲリス』をローマで完成させたほか、《モダン・シアター》のための音楽プロジェクトにも着手。また、世界各地の土着民族や、真のアイデンティティ確立のために闘うあらゆる民族団体を支援することも、彼の大きな目的のひとつであり、その意図は新曲〝バースライト〟にはっきりと読み取れる。

ジョンにとって《アンダーソン、ブラッフォード、ウェイクマン、ハウ》の目的は、一定のルールや形式に捉われず、純粋にすばらしい音楽をつくることだ。彼は言う、「僕らはプレイしたいんだ。ステージに立てば、それはもうすばらしいイベントであり、音楽を真心で演奏することができる……」。

BILL BRUFORD

ビル・ブラッフォードはジャズを聞いて育った。'60年代にはアマチュア・ドラマーとして活動し、ロイヤル・フィルハーモニック・オーケストラのルー・ポコックに手ほどきを受けて、1968年にプロの道へ。いわゆるブリティッシュ・アート・ロック・ムーヴメントの先陣に立ち、1968～74年にはイエスおよびキング・クリムゾンに在籍して世界じゅうをツアー。その後数年は、ゴング、ナショナル・ヘルス、ジェネシス、UK といったバンドを転々とするが、自作の曲でやっていけるという自信を深めて自らのバンド、ブラッフォードを結成し、1978～80年の間に4枚のアルバムを発表した。

しかし、彼がエレクトロニクスの使用によってパーカッションのメロディックな面を開拓しはじめたのは、再編されたキング・クリムゾンに籍を置いた1980～84年のことだ。続く2年間はパトリック・モラーツと組んで、アコースティック・ピアノとドラムスのインプロヴィゼーションから成るアルバム2枚を制作。1986年にはジャンゴ・ベイツ、イアン・バラミーと共に、現在も活躍中のエレクトロ・アコースティック・ジャズ・グループ、アースワークスを結成し、ジャズの分野に移行したとはいえ、引き続きドラム・セットを用いてのメロディ・ワークに取り組んでいる。アースワークスは1986～87年にファースト・アルバムを録音、1989年春にはセカンド・アルバム『DIG?』をリリースした。その他、ビルはこのところカズミ・ワタナベ、デヴィッド・トーン、ニュー・パーカッション・グループ・オブ・アムステルダム、ジャマラディーン・タクマ、アキラ・イノウエ、アル・ディメオラらのレコーディング／ツアーにも参加している。そして彼の最新プロジェクトがこの《アンダーソン、ブラッフォード、ウェイクマン、ハウ》というわけだ。

ビル・ブラッフォードは、妻と3人の子供、1匹のカメと一緒に、サリー・ヒルズに住んでいる。

CURRENT DISCOGRAPHY

Bill Bruford can also be heard on:

Bill Bruford: Masterstrokes	EGLP 67
Bill Bruford's Earthworks: Earthworks	EGED 48
Bill Bruford's Earthworks: DIG?	EGED 60

RICK WAKEMAN

リック・ウェイクマンがロック・シーンに登場してから20年がたった。1969年7月、デヴィッド・ボウイの伝説的なアルバム『スペース・オディティ』でメロトロンを弾いたのが、彼のデビューだった。

20年の間にはいろいろなことがあった。ストローブスに在籍した1年半、2,000以上のセッションへの参加（マーク・ボラン、ルー・リード、ブラック・サバス、キャット・スティーヴンスなどなど）、イエスへの2度の加入（1971～74年と1976～79年）、ケン・ラッセル監督の〈リストマニア〉〈クライム・オブ・パッション〉をはじめとする10本の映画のサウンドトラック制作、250を上まわるビデオ出演、さらに幾度にもわたるソロ・ツアーと24枚のソロ・アルバム。

〝ロック界のワイルド・マン〟と呼ばれた時代は今や遠い過去のこと、酒も煙草もやめたリックは現在、妻のニーナや子供たちとマン島に住み、〝大都会〟や〝大自然〟のプレッシャーに取り巻かれた日常生活を送ることに倦んだ75,000の島民と共に、素朴な生活を楽しんでいる。7つのゴルフ・コースを持つこの島は、熱心なゴルファーのリック（ハンディキャップは15）にとって願ってもない場所なのだ。

個人レッスンとロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・ミュージックで15年間クラシックを学んだ彼は、あらゆる類の音楽を好み、多様な音楽を融合させることによって、停滞したポップ界の未来を開けるのではないかと考えた。そして、同様の考えを持つイエスに活動の場を見出し、あとは周知のとおりである。当然のこととして、楽器製造業者には次第に多くが望まれるようになり、こうした動きを先頭に立って引っぱっていたリックは、この時期にたくさんのエピソードを残した（好ましいものもあれば妙なものも、無念なものもある）。

彼は堅く信じている、ABWHは彼と仲間のミュージシャンに、かつて4人が果たせないままに終わった〝音楽的職務〟を遂行するチャンスを与えてくれるだろう、と。

野心と夢に満ちた'90年代の始まりだ。

Seven principles of
the order of the universe

All things are differentiated
apparatus of one infinity

Everything changes

All antagonisms are
complimentary

There is nothing identical

What has a front has a back

The bigger the front
the bigger the back

What has a beginning has an end

© George Ohsawa
Microbiotic Foundation
1511 Robinson Street
Orvilleville
California
CA95965

STEVE HOWE

スティーヴ・ハウ個人がミュージシャンとして集めている尊敬には凄まじいものがある。これがスティーヴ、ジョン、ビル、リックの4人となると、それはもう畏敬の念になる。プレイヤーである彼の業績は、曲作りの才能と合わせて見た場合、より顕著である。プレイヤーとしてばかりかジョンを相棒にしたライターとして、スティーヴは常にグループの中心にあって音楽をクリエイトしてきた。本人は〝ギタリスト〟と呼ばれるのを好むが、イエス、エイジア、GTR、ABWHでの活躍ぶりを見れば、彼がひとつの肩書きで収まるような存在でないことは明らかだ。

彼のルーツは、ブリティッシュ・ロックの大半のプレイヤーと同じく、'50～'60年代初期の音楽にあるが、彼は徐々に多方面に興味を広げた。彼が編み出した流麗でユニークで強烈なロックへのアプローチが、ギターに対する彼の思い入れとこの楽器の秘める無限の可能性をいっそう際立たせている。

グループの中であろうとソロ・プロジェクトであろうと、スティーヴ・ハウがプレイするのは、しばしばロックの主流とはかけ離れた影響力やコンセプト、テクニックから引き出され、独特のテイストとスタイルでそれを拡大していくモダン・ギターなのだ。

スティーヴがゲスト・ギタリストとして関わったアルバムも数多く、最近ではオムニバスLP『ギター・スピークス』に参加。また、ポール・サティンというスイスのキーボード・プレイヤーと共に2枚のアルバムを制作し、ソロ新作『TURBULENCE』も完成させている。

《アンダーソン、ブラッフォード、ウェイクマン、ハウ》への加入により、スティーヴは再びジョンとの曲作りや新たな音楽スタイルの創造、ほかのメンバーを交えてのアレンジ・ワーク、それに友人のロジャー・ディーンと共同で当たる視覚デザインの作業などをエンジョイすることとなった。彼の冒険心はとどまるところを知らない。

TONY LEVIN

今やトレードマークとなった〝スティック・ベース〟の名手トニー・レヴィン。音楽界広しといえど、彼ほどの売れっ子ミュージシャンはちょっといない。ジョン・レノン、ピンク・フロイド、ピーター・カブリエル、ポール・サイモン――トニーのセッション・リストはそのままロック界の紳士録になりそうだ。独創的なアート・ロック・バンド、キング・クリムゾンもまた、彼の見事な技能の恩恵を受けている。トニーは1981～84年までこのバンドに在籍し、ドラマーのビル・ブラッフォードと共に3枚のアルバムとワールド・ツアーに参加した。

ABWH が結成されたとき、そこには足りないパートがひとつだけあった。しかも、適任者はたったひとりしかいなかった。ヴォーカリストのジョン・アンダーソンが言う、「ベース・プレイについて考えた場合、ことにそれがイエスのようなタイプの音楽だった場合、妥協は許されない。トニーの加入は本当に重要な意味を持っていた。エモーションといい音楽観といい、トニーは完璧な人材だったんだ」。

トニー・レヴィンは玄人はだしの写真家でもあり、彼の写真集《ROAD SHOWS》は、音楽ファンにも美術評論家にも称賛されている。

MILTON MACDONALD

ミルトンが ABWH に誘われたのは、グループがパリ郊外のフレット城内にスタジオをしつらえてからまもない1988年11月だった。なぜかといえば、無視するにはあまりにも多くのミュージシャンが、ジョンに彼を推薦したからだ。16年間ギター教育を受け、ロンドンでコンスタントに有名バンドのセッションをこなしていた彼は、このプロジェクトのセカンド・ギタリストとして申し分ないと思われたし、スティーヴのパートナーとしても理想的だったのだ。

ミルトンはミルトンで、自分がレコードを聞く側だったイエスというバンドのほとんどのミュージシャン（それにキング・クリムゾンの半分）と共演する夢がかなって大満足だった。こうして両者がパリで信頼関係を築きあげた結果、ミルトンはライヴ・ショウでもレコードと同じ重要な役割を務めることになった。アルバム『閃光』の音楽は非常に複雑な上に、クラシックへの新たなアプローチを試みているため、スピードとテクニックを兼ね備えたこの才能ある若手ギタリストの腕が、ぜひとも必要とされたのである。

ミルトンの自宅はウェスト・ロンドンにあり、妻のアストリッド、幼い娘のテリー・ルイーズと3人で暮らしている。

JULIAN COLBECK

1962年、10歳にしてコンサート・ピアニストになることをあきらめたジュリアン・コルベックは、すぐさまロックン・ロールに宗旨変えした。

彼の最初のバンドは、グリープというおかしな名前で、1973年にカリスマ・レコードと契約したが、さしたる成功も収められずに終わった。彼はその後、ロンドンの《アルバニー・シアター》の音楽監督を務めたり、イギリスのさまざまなツアー・バンドに参加したりしている。

そうしたバンドのひとつにチャーリーがあった。ジュリアンは1977年、アルバム『NO SECOND CHANCE』を制作中のこのバンドに加入し、続く『LINES』『FIGHT DIRTY』『HERE COMES TROUBLE』ではコ・ライター／コ・プロデューサーの役目も引き受けた。

さらに、一時ロサンジェルスの劇場で仕事をしたあと、イギリスへ戻った彼は、ジョン・マイルズ・バンドのキーボーディストとなり、数回にわたる全英／ヨーロッパ・ツアーを行なった。

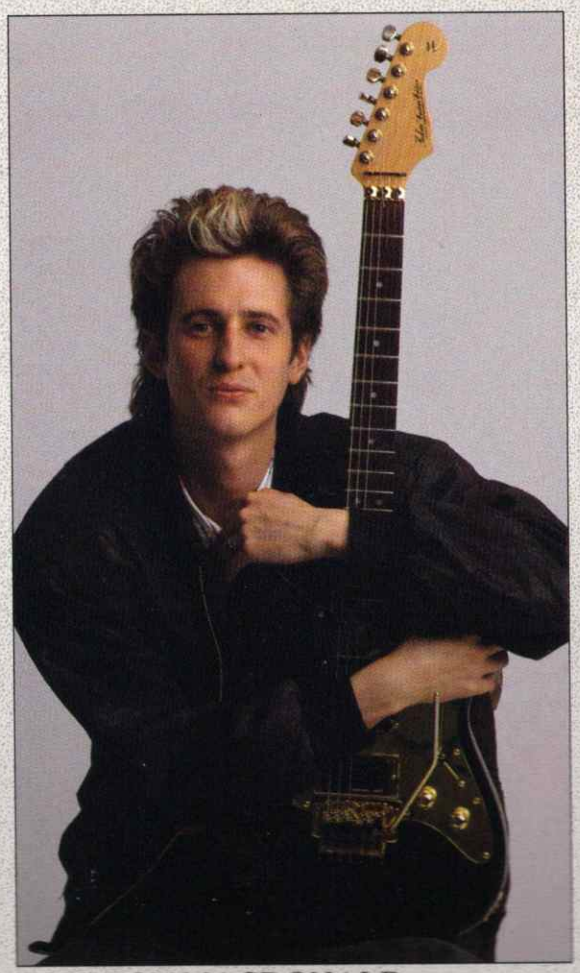
ジュリアンは'80年代半ばから、セッション・ワークのかたわら著述業にも乗り出し、1985年にヴァージンから出版された〈Keyfax〉(シンセサイザー購入のためのガイド・ブック）を手始めに、〈Keyfax 2 & 3〉〈Rockschool〉〈Zapppa〉〈How To Make A Hit Record〉(1989年9月出版) などの著作を次々に発表している。

ジュリアンがジョン・アンダーソンの目にとまったのは、最近のアラン・パーソンズとの仕事を通じてだった。音楽界屈指の実績を誇る4人のミュージシャンから、これまでになく野心的なライヴ・プロジェクトへの参加を請われたとき、彼が即座に肯定的な返事をしたことは言うまでもない。

ジュリアンの妻は、舞踊家であり写真家のアニー。彼らは生まれたばかりの娘アビゲイルとヘンリーオン・テムズで暮らしている。

TONY LEVIN

JULIAN COLBECK



MILTON MACDONALD

最強のラインナップで復活した本家本元の香り高き味わい

伊藤秀世
HIDEYO ITOH

今にして思えば、あれは明らかな謎かけではなかったか。ここ数年間にそれぞれ別個にインタヴューの機会をもったメンバーたちより図らずも洩らされた、いくつかの何気ない言葉の断片をつなぎ合わせると、ついそんなこじつけとも戯れてみたくなる。

「別居とか離婚に似ていてね、お互いに対する理解や感謝の気持ちさえ取り戻せば、いつだってまたもとのさやに収まるものさ」

同じ相手との再婚に、少なくともジョン・アンダーソンは乗り気だった。アンダーソン、ブラッフォード、ウェイクマン、ハウ(以下ＡＢＷＨと略)の誕生は、そのインタヴューからわずか５ヶ月後のことである。いや、もっと具体的な示唆も見て取れた。

「作品自体を簡潔に５分台、４分台へと凝縮できるまでとなったのは、賢さが備わったというか、ある種の成熟だろう。だけどあと２年もすると、昔みたいに演奏時間の長い大作が恋しくなると思うんだ、きっとね」

一方のリック・ウェイクマンは、どこか漠然と新たな方向性を模索しているかにみえた。まるでその答えを再びジョン・アンダーソンとの連係に求めるかのように……。

「何人かのゲスト・ヴォーカリストを交え、自分なりのデジタル・キーボード・サウンドを極めたい。以前はエルトン・ジョンでもチャカ・カーンでも、気軽に電話一本でちょっと歌ってよって声をかけられたけど、今は何でも契約、契約の時代だからね。ぴったりフィットするシンガーが見つかるといいな」

これらのあらゆる潜在意識が目に見えぬ不思議な磁力によってある一点へと強力に引き寄せられたがゆえ、今、こうして彼ら４人が揃ってステージへと飛び出してくる瞬間に、幸運にも立ち合うことができるのだ。

それにしても、書類上の問題からやむなくＡＢＷＨとの名称に落ち着いたものの、これは紛れもなく歴代最強のラインナップによる一歩進んだ究極のイエス再編にほかならない。かつての気の遠くなるような大作主義の完全復活とまではいかずとも、黄金期の彼らを強く特徴づけた愛すべき大仰な音の立ち振るまいと、特有の鷹揚にしてファンタジックな色彩描写とが、新作『閃光』のそこかしこに溢れる。やはりトレヴァー・ラビンがサウンド面での主導権を握った「ロンリー・ハート」のイエスとは、かなり肌触りを異にする、これぞ本家本元の香り高き味わいとでもいおうか。

久々にハードに切れ込むスティーヴ・ハウの鮮やかなギターさばき。きめ細かな音の装飾を幾重にも縫い上げるリック・ウェイクマンの多彩なキーボード群。そして、たたみかけるコーラス・ワークの狭間をいきいきと跳ね回るジョン・アンダーソンの霞がかったクリスタル・ヴォイス。ただし、相変わらず極端な変拍子を好むビル・ブラッフォードと急遽コンビを組んだ、トニー・レヴィンのあまりにタイトなリズム・キープぶりは、どうしても後期のキング・クリムゾンを連想させ、クリス・スクワイアならではの奔放なはみ出し加減が妙に懐しくも映るが、無い物ねだりをしたところで始まらない。何しろＡとＢとＷとＨとが一堂に会してこそ起こり得た、この信じ難い「魔法」を通じて、エイジアやＧＴＲ、さらにはジョン＆ヴァンゲリスにさえ、往年のイエスの匂いを必死に嗅ぎ取ろうと務めた愚行とも、いよいよお別れなのだから。しかも、「あれだけ小さなＣＤのケースに、もはや込み入ったデザインなど用をなさない」と語ったジョン・アンダーソンの諦めを見事に覆してみせた、かのロジャー・ディーンの手になる念入りなアート・ワークの美麗さには、秘かなため息すら禁じ得ない。

ローリング・ストーンズとの共同作業をきっかけに名をあげたクリス・キムジーの制作介入も手伝い、今回の『閃光』にあっては、きっちり今日性と娯楽性とが踏まえられた、実にとっつき易い仕上がりへと話題は集中しがちだ。しかし、ここで特筆すべきは、元来、ガラス細工にも似た繊細さを擁すメンタルな側面ばかりが取り沙汰されてきた彼らの音楽が、打って変わってボディ・アンド・ソウルへと著しく訴えかける、より根源的な人間味へと急速に近づきつつある点に尽きるのではなかろうか。聞けば、昨夏よりスタートを切った彼らＡＢＷＨのワールド・ツアーには、「An Evening Of Yes Music, Plus」との謳い文句が添えられているとのこと。古くからのファンとしては、正直いって、〝遙かなる想い出〟や〝ラウンドアバウト〟は、是非とも聴きたい。だが、最も気になってならないのは、むしろ「Plus」の部分、すなわち'90年代へと大いなる第一歩をしるした新たなるイエス・サウンドが、どのような手順と感触とをもってステージ上にて繰り広げられるのか――それをこの目ではっきりと見届けたいと思う。